



Data

監督：ユン・イノ
 原作：ウィ・ギチョル『9歳の人生』
 (河出書房新社刊)
 出演：キム・ソク/イ・セヨン/チ
 ヨン・ソンギョン/チ・デハ
 ン/キム・ミョンジョ/ナ・
 アヒョン/アン・ネサン/チ
 ヨン・エヨン/チェ・ドンム
 ン

👁️👁️ みどころ

『若きウェルテルの悩み』をはじめ思春期特有の悩みを描いた本や映画は多いが、9歳の時だって恋の悩みはもちろん人生の試練が！ましてや、9歳にして冤罪に巻き込まれたら？韓国のベストセラー小説を原作にした2人の主役と2人の準主役たちのみずみずしい演技は面白さと感動でいっぱい。こんな映画を観ているとつい体罰も悪くないナと思ってしまうのだが、それって危険思想・・・？

2004年の名作は、小学生たちが主役

ユウラク座で5月23日から7月3日まで開催している「韓国映画セレクション」で、「庶民の暮らしの変化」と題して最終の週で2本立て興行したうちの1本が本作。本作はウィ・ギチョル作の韓国のベストセラー小説『9歳の人生』を2004年に映画化したものらしい。そんな名作を鑑賞できたのはユウラク座の今回の企画のおかげだが、タイトルどおり本作の主役と準主役は9歳の男の子と女の子たち。そして、時代は高度経済成長期に入ろうとする1970年代だがそれは都会だけで、本作の舞台はソウルの貧民街の山の町というところらしい。

主人公は小学3年生ながら5年生のガキ大将をやっつける、心優しき少年ヨミン(キム・ソク)。ヨミンがメガネ屋のショーウィンドーをのぞき込みカッコいいサングラスをやけに欲しそうにしているシーンが登場するが、それは一体なぜ？それは、ある事情によって右目が見えなくなっているヨミンの母親(チョン・ソンギョン)にそのサングラスを買ってやりたいためだが、そんなヨミンの思いが後半劇的なストーリー展開を呼ぶうえ、母と息

子との涙のシーンが登場するからそれに注目！

他方、ヨミンの子分でヨミンから弁当を分けてもらうほどの親友の男の子がギジョン(キム・ミョンジョ)そして、2人の男の子の真ん中にある何とも口の達者な女の子がクムボク(ナ・アヒョン)だ。私は自分が9歳だった松山市の八坂小学校での3年生当時の生活ぶりを思い出し、それと対比しながらこの3人の生活ぶりを楽しく観察していたが、突然ヨミンのクラスにアメリカ帰りというえらく可愛い女の子チャン・ウリム(イ・セヨン)が転校してきたうえウリムがヨミンの横の席に座ったから、ここからさまざまなストーリーが生まれることに。

興味深い担任教師と生徒との力関係に注目！

平和ボケのうえ、民主主義ボケ、平等ボケした今の日本では、小学校の担任教師が生徒に暴力をふるうことなど到底考えられないが、1970年代の韓国の教育の現場では？ヨミンたちの担任教師(アン・ネサン)はいつも右手に細い棒を持っているが、これはどうも生徒をたたくための道具らしい。ヨミンもガキ大将としてケンカする時はかなりの実力を発揮するが、相手が担任となると物理的抵抗はもちろん、口答えさえ一切できないほどの「特別権力関係」が成立していることがよくわかる。

その1は、ヨミンがウリムに出したラブレター(?)をめぐってヨミンが担任からこっぴどく叱られるシーン。その2は、ヨミンが後述する1100万ウォンの犯人にデッチ上げられた時にみる担任のお仕置きシーン。これは棒で頭をたたくだけでなく、ヨミンを足げにするほどの激しさだから、いくら何でもちょっとやりすぎでは？

大阪府の橋下徹知事が提唱している「教育改革」の中には体罰の復活は含まれていないが、宮崎県の東国原知事の教育改革論では？時代が変わったとはいえ、こんな担任教師と生徒との力関係のあり方を目の当たりにすると、それがいかに新鮮？

子供は大人たちから何を学ぶ？

五木寛之の『青春の門』では信介少年は高竜五郎からさまざまなものを学んだようだが、川でおぼれかけているウリムを救出したヨミンが、お礼を言われた時に言う「お父さんに教わった。男は女を守るものだ」とのセリフは高倉健ばりでちょっとカッコよすぎ？ヨミンがクムボクのような田舎の女の子とは全然違う雰囲気をもったウリムに一目惚れしたのはある意味当然だが、小学校3年生ではまだ恋の道がわからないのは当然。そんなヨミンに恋の道を教えたのが、美しいピアノの先生にホレこんでいる(片思いしている)さえない風体のパルボン(チェ・ドンムン)。貧乏哲学者風の彼が言うことはあまりにも哲学的すぎるからヨミンには理解不可能だが、それでも「愛する人には何かしてあげたい」という気持だけは伝わったようだ。

さらに、本作にはヨミンたちにえらく優しいクズ鉄屋のおじさんが登場するが、彼には

左手がなく義手なのは一体なぜ？日本と違い韓国には徴兵制があり、1960年代後半のベトナム戦争には韓国の若者たちが大勢従軍していたはず。すると、今や日本では死語になっている傷痕軍人が1970年代の韓国にはたくさん存在？なるほど、1991年に刊行されたウィ・ギチョルの原作が10代から40、50代まで幅広く読まれ、130万部以上のベストセラーになったのは、そんな細かい配慮も一因？

小学校の教室内でも冤罪が？

周防正行監督の『それでもボクはやってない』(07年)では、強力な弁護団の弁護にもかかわらず金子徹平青年は有罪になってしまったが、これはひょっとして冤罪？他方、弁護人が申請した再度の「DNA鑑定」によって逮捕当時の自白と科学捜査研究所(科捜研)のDNA鑑定を覆し、4歳の女兒殺害が冤罪であることが明らかになったのが、足利事件の菅家利和さん。1審、2審、最高裁でいずれも有罪とされ、再審請求も1審では認められず、17年間も自由を奪われた菅家さんの無念はいかに晴らされるのだろうか？

それらが他人ゴトではないと痛切に思い知らされるのが、ウリムが学校に持ってきていたという1100万ウォン紛失事件とその犯人捜し。小学3年生ながらヨミンはいろいろなアルバイトをしており、毎回の稼ぎをツボの中にしまい込むのが大きな楽しみ。今日はそれが1100万ウォンまで貯まったから、あのサングラスを買うべくメガネ屋に寄ったのだが、その売値は1300万ウォン。いくらまけてくれといってもまけてくれず、「貯金が貯まったらまた買いにおいで」という冷たい返事。何と人情味のないメガネ屋のおやじだ、とスクリーンを見ている私は腹が立ったが、それはきっとヨミンも同じ。しかしそれ以上どうしようもないヨミンは、そのまま1100万ウォンを持って学校へ。すると学校の様子がおかしい。ウリムがしきりにノートをめくりながら何かを探していたが、話を聞いているとどうも今日持ってきていたはずの1100万ウォンがなくなったらしい。こりゃやばい。たまたまその日1100万ウォンを持っているヨミンがそう思ったのは当然。そこでヨミンは、ウリムにしかカギを預けていないさぎ小屋にそのお金を隠したのだが、それが運悪くみつかったから大変。ヨミンが貯金した1100万ウォンはお札ばかりではなく小銭もいっぱいだったから、ウリムは「私が持っていたのはお札ばかりの1100万ウォンだった」と主張したが、そこでお札を小銭に替えるくらいは簡単だという予断をもってしまったのが担任。それによって、あっさりヨミンが1100万ウォン紛失事件の犯人に仕立て上げられたわけだが、さてその結末は？

ウリムは嘘つき？小学生だって女同士の葛藤は？

ウリムが転校してきたことによって、それまでの良好で安定していた人間関係(男女関係？)のバランスが崩れたことに1番腹を立てているのがクムボク。だってクムボクはそれまでヨミンとギジョンの真ん中でチャホヤされていたのに、今やヨミンもギジョンもウ

リムばかり注目しているのだから。そのうえヨミンはウリムに対して、自分には全然見せなかった西洋の騎士(ナイト)のような振る舞いまで・・・。

そんなクムボクの怒りがウリムに向かったのは当然だが、そこでまたヨミンが露骨にウリムの味方をしたからクムボクは泣き崩れてしまったが、小学3年生といえどもやはり女の根性はたいしたもの。さかんにアメリカ帰りを自慢しているウリムだが、どうもそれが怪しいとにらんだクムボクは、単身担任にその真偽を問い質したが、それはあえなく門前払い。しかし川で溺れかけたウリムを心配して駆けつけてきたウリムの母親に対して、場所がらも空気さえもわきまえず、「ウリムはアメリカで生活していたの？」と質問をぶつけたところ、何とも意外な答えが。そして、それはクムボクが内心密かに期待していたものだったから、クムボクはにんまり。ところがそれをヨミンに伝えたと、ヨミンはガキ大将としてその口止めを命じたからクムボクはおかんむり。しかし、今やクムボクにとって、ウリムは明らかな嘘つき女であることが判明したから切り札はクムボクに・・・。

ところが映画のラストに至り、ある事情によってウリムがソウルの学校へ転校することに。そして、教室の中でウリムが語る最後のあいさつを聞くうちに、みるみるクムボクの目は涙いっぱい。なぜそれまでウリムはそんなウソを？また、なぜウリムは今そんなウソをついていた真相を暴露？本作には思わずもらい泣きをするシーンがいくつかあるが、あなたにとってこのシーンもきっとそれ？

2009(平成21)年6月30日記

ボン・ジュノ監督は美男美女嫌い？

『キネマ旬報』11月上旬号は、『母なる証明』についてボン・ジュノ監督と黒沢清監督の特別対談を載せた。2人は08年カンヌ国際映画祭の会場でひしと抱き合った仲だ。そこでは 圧巻のオープニング、夜の屋上シーンの力、ボン・ジュノ作品と“水”との深い関係、果たしてトジュンはどこまで知っていたか？、2つに分かれたラストシーンの解釈など、高度な議論が展開されている。私が面白かったのは、ボン・ジュノ監督は整形嫌い？はたまた美男美女嫌い？という問題提起だ。もちろん難しいトジュン役を演じたウォンピンは美

男スターだが、本作ではそれが売りではない。また、殺された女子高生やその不良仲間そして町のチンピラに至るまで、俳優はみんな個性的な顔ばかり・・・？現にボン・ジュノ監督は「整形手術をしている人は使わないらしい。そもそも美男美女自体がダメらしい」と言われているそうだが、さてその真相は？ちなみに、女子高生は『グエムル-漢江の怪物-』(06年)の最終オーディションに残ったうちの一人とのこと。そう考えると、映画スターを目指すには、必ずしも美男美女でなくてもオーケー？

2009(平成21)年11月5日記